

社会科で論争問題を話題にする意味
ーデモクラシーと論争問題学習の関係性からー

【キーワード】社会科教育実践，議論：討論（論争問題学習），デモクラシー

坂井清隆（福岡教育大学）

1. 「思考力・判断力・表現力等」

小学校学習指導要領（平成29年度告示）では、協働学習や対話的な学び、「言語活動の充実」などが示され、授業における他者とのコミュニケーションの質の向上が求められるようになった。そのため公民としての資質・能力の育成を主たる目標とする社会科教育においても、子どもの議論する力を高める指導の充実に向けて数多くの実践がなされている。特に「思考力・判断力・表現力等」は、身に付けるべき3つの資質・能力の一つとして挙げられており、その重要性は際立っている。解説社会科編の「表現力」の部分では、「考えたことや選択・判断したことを説明する力や、考えたことや選択・判断したことを基に議論する力」として定義されており、社会的事象（社会的論争問題）について、「互いに自分の主張を述べ合い論じ合う」ことが、「議論する」ことの中心であるとされている。

社会科学学習の方法論としての「議論（≒討論）※」は1990年代のディベートの隆盛とともに注目されてきており、まさにメリット・デメリットも含めて、その方法論そのものが「議論」されてきた。その中で、「何について」「どのような立場で」「どのような方法で」が明確にされないまま、単に「言い合うだけ」の実践も散見されている。このような現状から、「議論」と社会科教育の目標（本質）との関わりについては、池野範男の社会形成科や、水山光春、吉村功太郎の合意形成論など

で論じられてきたし、本会においても具体的な授業実践の提案が行われてきているが、まだまだ議論を学習形態や方法としてのみ捉えるという見方は根強い。そこで、改めて、社会科教育実践において議論することの意味について考えてみたい。

※なお、一般的に、「議論」は、他者と協力しながら、1つの結論を出す行為、「討論」は、賛成派・反対派の立場に立ち、それぞれが有利なような主張をし合う行為とされている。

2. デモクラシーと社会科教育

アメリカのSocial Studies（民主主義を支え、発展させる良き市民の育成を目的とした教科）を源流をもつ日本の社会科は、その誕生から70年以上を経ても、本質は変わらない。社会科は「民主主義社会の建設にふさわしい社会人を育て上げ」る教科（昭和22年学習指導要領社会編（試案））であり、民主主義は「社会科全体をつらぬく教科原理」（谷本1999）である。

多数決の原理（合意できない他者も取り込んで政治的決断を図ろうとする原理）を基礎とした社会を民主主義社会とするならば、その決断のためのプロセスには、「議論」もしくは「話し合い」が必須である。小西（2017）は、『平和で民主的な社会の形成者』（指導要領ママ）を育てたいとするならば、社会科授業に『過度な有能感を抑止するための仕掛け』もまた要求されてしかるべきである。（中略）デモクラシー（民主政）をとりあえず維持するためにも、それは必要なことではある

まいか」(下線筆者)と述べているが、まさにその仕掛けこそ「討論」であると考える。

3. これからの論争問題学習

川口(2020)は、これまでの日本の社会科教育実践における「討論:論争問題学習」について、詳細な検討を行っている。その中で、これまでの論争問題学習の論点は、どのような内容(教材)を、どのような方法で行わせるか、つまり教師側のスタンスがそのものであったとしており、今後、討論に参加する「子どもの実態」こそを、実証的に明らかにすること必要であると指摘する。そのため、今回の三者鼎談による各自のサブテーマには「～を通して育つ子どもの姿」が付いている。単に、討論型の社会科学学習を成立させる手順や工夫に留まらず、討論という学習活動を通して、子ども自身が「何を学んだのか」というアプローチから、三者の鼎談を進めて行きたいと考えている。

4. 3つの実践を手がかりとした社会科教育における「討論」を通した子どもの姿

本会では、3つの実践を手がかりとして、社会科教育における「討論」(討論に参加する、討論に参加しない)を通した子どもの姿を考えることを目的とする。その際、以下の3名の独創的な実践に果敢に挑戦している実践者にご登壇いただく。

1人目は、筑波大学附属小学校の梅澤真一氏で、題目は「論争問題に取り組み、子どもが『当事者』になる社会科—二項対立にこだわる理由とこの活動を通して育つ子どもの姿—」である。氏は、社会の問題に対する価値判断・意思決定の学習過程を組み立て、二項対立をベースとした討論の授業を多く

開発、実践している。

2人目は、お茶の水女子大学附属小学校の岡田泰孝氏で、題目は「論争問題に取り組み、子どもが『当事者性』を涵養する社会科—『当事者性』にこだわる理由とこの活動を通して育つ子どもの姿—」である。氏は、論争問題学習や提案型の学習を数多く実践し、特に学習成果(アウトカム)からのアプローチによって、子どもの実態を明らかにしている。

3人目は、筑波大学附属小学校の粕谷昌良氏で、題目は「論争問題に取り組みず子どもが『当事者』に出会う社会科—アナザーストーリーにこだわる理由とこの活動を通して育つ子どもの姿—」である。氏は、「アナザーストーリー」という子どもの認識や意見を揺さぶるための独自の学習論を構築し、それに基づく実践を蓄積している。

本大会では、子どもが「討論にどのような立場で参加するのか(参加しないも含む)」から一歩進んで、子どもは「どのようなマインドなのか」「それによって育てられる資質・能力はどのようなものなのか」について深めていきたい。

本会では、指定討論者としてお茶の水女子大学の岡田了祐氏に、主題に関わる論点の整理とリサーチクエスチョンを提示していただく。

最後に、京都橘大学水山光春氏に講評と主題に関わる講話をしていただく予定である。

【註】

- ・谷本美彦(1999)「社会科と民主主義」社会科教育学ハンドブック 明治図書 p21
- ・小西正雄(2017)日本社会科教育学会第67回全国研究大会発表資料
- ・川口広美他(2020)『『論争問題学習』はどのように論じられてきたか』広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第1号 p47